

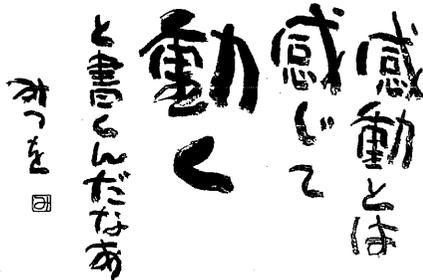
さくら第554号

令和8年 2月

さくら

発行所 さくらそろばん
発行者 平瀬重雄
春江町境 17-7・TEL51-1337
hirase@mx2.fctv.ne.jp

冬の朝道々こぼす 手桶の水 季語 冬の朝 杉田久女 寒い冬の朝にかじかむ手で道中にこぼしてしまおう手桶の水だ



『ひたむきさ』

日本で初めて鉄道が開通したのは1872年(明治5年)の10月14日、東京の新橋から横浜間の約29キロを55分前後で運行し、時速32~35kmで走ったと言われています。

東京~新大阪間の新幹線では、1964年には4時間で走行し、2025年には時速210kmで2時間21分での運行がふつうになりました。

さて、1月2日と3日のテレビで人気ある番組といえば箱根駅伝があげられます。

第102回東京箱根間往復大学駅伝第1日目は2日、東京大手町から神奈川県箱根町までの5区間107.5キロに、関東の20校とオープン参加で順位なしの関東学生連合を加えた21チームが参加して行われ、青山学院大学が5時間18分8秒の新記録で3年連続8度目の往路優勝を果たしました。

この日の最大の見せ場は、1区で16位と出遅れたが箱根の山のぼりの5区で黒田朝日選手が抜群の走りでもっと出てそのまま18秒差で優勝しました。

3日の復路は5区間109.6キロも青山学院大学は全員が区間3位以内で「たすき」をつなぎ総合優勝です。

さて、この箱根駅伝の人気はどのようにして生まれ続けているのでしょうか。ただひたすら走りぬくだけの単調な動作の繰り返しが何故に多くの人たちの心を引きつけ、感動を与えるのでしょうか。この便利な世の中で何も苦しい思いをして走ることは普通の生活の中ではありえません。

ところで、箱根駅伝にはその年に10位以内

ならば翌年はシード校として出場できますが、11位からは改めて開催される予選会での成績上位から出場可能となります。

今年の10位は日本大学が10時間53分56秒で、シードを外れた11位の中央学院大学は10時間54分51秒であり、わずか55秒の違いです。10時間余のなかでの55秒差です。

そして箱根駅伝予選会が開催されたのは昨年の10月18日に東京自衛隊立川駐屯地公認コースで21.097キロのハーフコース。

各大学校上位10名の合計タイムで10チームが決まります。41校がエントリーして、各大学とも選手14名が参加していました。

1位は中央学院大学で10時間32分23秒で、10位が立教大学の10時間36分56秒。予選を通過しなくなった11位の法政大学は10時間37分13秒となり、たった17秒の違いで駅伝に出場できなくなりました。

このような出来事を思いながら懸命に走る姿を見ると、1歩いっぽの足の運びに気持ちがいこもります。

1年間の練習を続けるなかでチームのレベルアップを図るための過酷なトレーニングに耐えるだけの精神力が重要になります。

そろばんの学習のなかでも日々の練習を効果的に継続するには自分自身のやる気と根気と創意工夫が必要です。

今の時代、そろばんを仕事で使うことがないのになぜ学ぶのかという人もいます。では、車社会だから速く走るなど必要ないのに、なぜ走るのでしょうか。

人間は自分が求める目標に向かい必死で挑戦する過程のなかで、努力する意義と達成した時の満足感、心の充実、さらなる高みへの向上心が培われます。

そろばんの検定試験は10級から十段まであります。学習する年齢や期間に応じて受験し合格することでステップアップします。あと少しの努力を継続できるか否かで結果が違います。何事にもひたすら励む姿は美しく、見る者、接する人達にあたたい心運びます。